

現代作家と未来のつくりびと達による作品発表を通じた交流



出展作品を見学し、作者とも交流



左から国民みらい出版代表・小林義隆、一般財団法人言語交流研究所代表理事・鈴木堅史、出展作家・金田英峰氏

本誌『つくりびと』は創刊一〇周年を記念し四月一五～一七日、東京芸術劇場にて『創刊十周年記念・つくりびと総合芸術展二〇二二』を開催、様々な分野の芸術作品を展示し多くの来場者にご覧頂く事が出来ました。本展では希望ある未来をイメージし、多くの青少年の絵も飾り、見学会も行いました。本展協団体として尽力して頂いた一般財団法人言語交流研究所 ヒッポファミリークラブ様による開催報告をご覧ください。

東京芸術劇場五階ギャラリ。ガラス張りの入り口に、赤色や青色、黄色……。色鮮やかに描いた子どもたちの絵画が多数飾られた。多言語の自然習得と多国間交流を日常的に行って四十年のヒッポファミリークラブ（以下ヒッポと略す）の子どもたちを中心に呼びかけ、たくさん子どもたちから集まった一三三点の絵画である。会場の複数の場所に、七つのテーマに分かれて展示されている。ヒッポの子どもたち以外にも、二月の春節の時期に行われた「中国オンライン交流」をきっかけで繋がった中国の「全国児童書画書道コンクール組織委員会」や中国大使館のご家族の子どもたち

ちからの出展もあった。

今回の絵画展の為に、オンライン越しに子どもたちに集まってもらい、「こどもの国際交流」をテーマに一緒に絵を描こう、という会を開いた。コロナ禍中の苦肉の策であった。しかし、オンラインだからこそ、日本のみならず、中国からの子どもたちも参加。絵画を通じての国際交流の場となった。たった九十分の短い時間ではあったが、子どもたちは想像力を膨らませ、あつという間に絵を描いていく。そしてつぎつぎと、「こんな風に書いてみた!」とお互いの絵画をZoomの画面越しに見せ合う。「いいねー!」「うわあ、上手だね」「真(チェン)棒(パン)!(すごいね!)」「很(フン)好(ハオ)(とてもいい)」「笑顔で褒め合う姿は微笑ましかった。

中には、「ファミリー」と呼ばれるヒッポの日常の多言語活動の場から、仲間と一緒に参加する家族もあった。子どもたちの国際交流の繋がりが、そして夢は尽きることなく、どんどんと広がっていく。

折しも世界が戦争という不穏な雰囲気にもあった。子どもたちは敏感に世界の動向を感じ、それぞれの思いや願いを絵に

面越しにお互いの家族や街を紹介したり、一緒に折り紙を折ったり、餃子などの料理を教えてもらって一緒に作って食べたり。中にはかくれんぼを一緒にやったよ!と、驚くような創意工夫を凝らして交流を楽しんでいる。正に時空を超えた交流だ。こうした出会いを通じ、次は本当に会いたいという気持ちが生まれていくのが分かる。

コロナ禍になって、もう二年以上になる。国際交流ということばは、幼児にとっでは想像しづらくなっているのかもしれない。しかし、子どもたちの絵画を眺めながら、国際交流を拡げていく意義を痛切に感じた。

人間という漢字は、「人」と「間」という二文字の漢字で作られている。人はひとりでは生きられない。人は出会うことが大切だ。出会うことで相手を理解し、自分自身も豊かな心を育むことができる。未来を担う子どもたちには、閉ざすことなく様々な人たちにたくさん出会って、互いを理解し、違いを認め合い、相手を思いやる気持ちを育ててもらいたい。

今回の絵画展が、『未来のつくりびと』としての子どもたちの夢を育む力になれば幸いと思う。末尾になるが、このような機会を下さった主催の国民みらい出版様に心より感謝を申し上げます。

込める。「世界は同じ空でつながっている」「みんな違っていい」「世界中のみんなと仲良くなりたい」。子どもたちから大人たちへのメッセージをどう我々大人は受け止めるべきなのか。

「国際交流の思い出」をテーマにした絵画では、今まで出会った海外のお友だちと、また会いたいという、気持ちのこもった絵画が集まり、国境を越えて出会ったお友だちに想いを馳せていることが感じられた。

「未来の国際交流」のテーマでは、先に国際交流に参加したお兄さんやお姉さんの体験を聞いて、次は自分が世界に飛び出して、新しいお友だちを作るんだ、という夢と希望に満ちている絵が集まった。

ヒッポの子どもたちの絵画は、風景より「人」が描かれるものが多いのが特徴

的だった。多言語活動の中で、誰にでも心を開き、線を引かずに生きる力を自然に身に着けているからであろう。多言語活動の創始者・榎原陽は、「宇宙から地球を眺めたとき、『国境』という線は、どこにもないよ。」と度々話していた。子どもたちの中に多言語活動の精神が根付いていることが誇らしい。

身近な海外のお友だちを描く絵画もあった。近所に住んでいるフランスのお友だちやジャマイカの先生。大胆な筆使いから、ほのぼのとした温かい気持ちが伝わってくる。

また、オンラインでの交流をテーマにした絵画もあった。ヒッポでは、海外の行き来が制限されたコロナ禍の中でも、アメリカや中国、韓国、ロシア、台湾など世界中の国々や地域とオンライン越しに交流するプログラムを行っている。画



見学会の様子

【巻頭コラム】一般財団法人 言語交流研究所 ヒッポファミリークラブ 活動推進部

ヒッポファミリークラブ公式ホームページより

イベント報告の詳細はこちらです
https://www.lexhippo.gr.jp/wp/topics/topics_12894.html

出展作品はこちらからご覧いただけます
<https://www.lexhippo.gr.jp/kaigaten2022/>

【作品評論】面谷哲郎（おもや てつろう）
1940年、東京都生まれ。京都大学文学部美学美術史学専攻を卒業後、筑摩書房に勤務。『古典落語』『江戸時代図誌』『井伏鱒二全集』ほかの全集、また『日本美術史の巨匠たち』『油絵初学』『眼鏡絵新考』ほかの単行本を編集。併せて幼年向け童話の創作、美術評論の執筆などで現在に至る。

